

漁業練習船天鷹丸 第180次航海概要

独立行政法人水産大学校漁業練習船天鷹丸（水谷壮太郎船長ほか乗組員28名、実習生51名）は、平成21年5月12日から7月10日までの60日間、北太平洋西部及び東シナ海において、総航程約7,400海里（約13,700km）の遠洋航海実習を行った。北マリアナ諸島自治連邦のサイパン、ミクロネシア連邦のポンペイ、パラオ共和国のマラカルに寄港した。実習生は、専攻科船舶運航課程生23名と専攻科船用機関課程生28名の計51名。

乗船実習生に対し、本科（4ヶ年）において修得した課程の上に、更に精深な専門的学識を修め、高度の専門技能を修得することを目的に、航海学、機関学など船舶運航や漁業管理に関する講義及び実習を行った。

今航海では本校と水産庁、水産総合研究センター及び東京大学海洋研究所と連携して、新月の5月24日を挟んで5月18日から5月27日までの10日間、太平洋西マリアナ海嶺南部海域において、乗船実習生も加わり、ニホンウナギ産卵生態調査として、CTD装置による海洋環境観測及び中層トロール曳網採集調査を行った。この共同調査の目的は、養殖用種苗の減少が著しいウナギの天然での繁殖生態や仔魚の生育環境を解明するため、産卵場と想定されている同海域においてウナギ親魚や卵、初期仔魚の採集調査である。

また、ミクロネシア連邦ポンペイ寄港時においては、実習生は中西部太平洋マグロ委員会（WCPFC）事務局を訪問し施設見学を行うとともに、同委員会科学マネージャーから中西部太平洋におけるマグロ資源管理状況についての講演を受けた。

さらに、東シナ海奄美大島北西方の黒潮観測定線（TAWARAライン）でのCTD装置による海洋環境観測実習、東シナ海での離底中層トロール漁業実習によるエチゼンクラゲ採集調査を行い、エチゼンクラゲの平衡石を採取した。東シナ海から対馬海峡西水道にかけての日韓EEZ境界線沿いと下関までの帰途においては、日出から日没までエチゼンクラゲ目視観測調査を行うとともに連続表面海水温・塩分計測装置による海洋環境調査を行った。